



1990(平成2)年10月10日、関東大学ラグビー対抗戦の筑波大学戦に出場した日本体育大学時代の林(写真右)

ここで國學院のエース本間は、ついにマウンドを降りた。目黒はプロ注目のピッチャーをノックアウトしてしまったのだ。

6回を終了し、6対2と目黒のリードは4点に広がった。さらに7回も國學院の攻撃を0点に抑え、「正直、この試合は勝てる」と林は思ったという。「あと2回でしたから」。

しかし國學院もエースがKOされたとはいえ、優勝候補の意地があった。8回表に5番の佐藤敦が、満塁の走者を一掃するタイムリ―二塁打を放って1点差に迫ったのだ。そして試合は6対5と目黒のリードで、大詰めの9回表、國學院の攻撃を迎えた。

目黒のエース山口は、この回いきなり先頭打者に死球を与えて出塁を許すと、ヒットエンドランを決められ、三塁のピンチを招く。その直後、不覚にもボークを犯し、6対6の同点に追いつかれた。動揺を隠せない山口は、さらにワールドピッチで走者を三塁に進めて

第66回全国高等学校野球選手権大会  
東京大会2回戦 目黒VS國學院  
1984年7月20日 早稲田大学・安部球場

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
國學院	0	0	1	1	0	0	0	3	2	7
目黒	0	0	1	1	3	1	0	0	0	6

  

國學院	年	打	安	点	
中	島村 正人	3	5	3	2
捕	向堀 昭裕	3	5	0	0
遊	徳原 康晴	3	3	1	0
投	本間 孝行	3	3	1	1
三	佐藤 敦	3	3	2	3
一	胸谷 孝幸	2	2	0	0
投	齊藤 功	3	2	0	0
左	鳥光 裕	3	3	0	0
右	星野 仁	3	3	0	0
二	山梨 善一	3	2	1	0

  

目黒	年	打	安	点	
遊	林 憲仁	2	4	3	1
二	志村 聡史	3	4	2	0
三	戸沢 修	3	3	0	0
捕	齊藤 誠	3	4	2	1
投	山口 直彦	3	4	1	2
中	安部 昭彦	2	4	3	2
左	落合 克任	3	4	1	0
右	鈴木 敦	3	2	0	0
打	弘田 智康	2	1	1	0
走	竹下 雅康	2	1	0	0
三	藤見 暢一	3	4	1	0

  

●國學院	殺手名	回	被安	失
	本間 孝行	5	11	5
	齊藤 功	4	3	1

  

●目黒	投手名	回	被安	失
	山口 直彦	9	8	7

打線が爆発した目黒は9回途中まで國學院をリードしたが、土壇場で自滅する形で逆転負け。しかし優勝候補からあわや金星、という健闘を見せた。

「最初で最後のあんな情けない声」で戻るよう言われたため振り返ると、安部は主審から「厳重注意を言い渡された」という。このプレーを試合翌日付の報知新聞は、「捕手にもすごい体当たり」という言葉で評している。

3回表、目黒のエース山口は、國學院の1番、島村正人にホームランを浴び先制点を許す。しかし目黒もすぐに1点を返し同点。続く4回表、國學院に勝ち越しを許すも、目黒はその真すぐに1点を返して同点に追いつき、2対2で5回を迎えた。

5回裏、目黒は國學院のエース本間に集中打を浴びせて3点の勝ち越しに成功。5対2

「アウト！」

主審に宣告され、安部はダッグアウトへ向けて歩き出した。その時ベンチ前で立ち上がった梅木が、震え声で言った。

「お、おい安部。審判が呼んでいるよ...」



三塁ランナーの安部(写真左)はホームに向かう途中、更衣室での一件を思い出しながら國學院の向堀(写真右)に体当たり。ラグビー仕込みの激しいタックルが炸裂した

らも、ずっと頭の中を更衣室での一件がよぎっていた」というから、ここぞとばかりに燃っていた火種が燃え上がったというところか。

「アウト！」

主審に宣告され、安部はダッグアウトへ向けて歩き出した。その時ベンチ前で立ち上がった梅木が、震え声で言った。

「お、おい安部。審判が呼んでいるよ...」

「おい安部、サインはホームランだ。ホームランを打て！」

「ウーイ！」

低音で安部が返事をしたのを、林ははつきり覚えているという。そして安部が「外角低めのストレート。一番のツボ」の球を思い切り叩き返すと、打球は安部球場レフトスタンドに突き刺さってしまった。

「ベンチは大笑いですよ。我々も笑ったけど、梅木先生も爆笑で『本当に打ったよ』って。それを聞いてまた、みんなで大笑いしました(林)

しまつと、國學院にスクイズを決められ、ついに逆転を許してしまったのだ。

その裏の攻撃で得点を挙げることでできず、目黒は6対7で試合に敗れた。ホームベ―スを挟んで終了の礼をするとき、國學院の選手から「お前ら、本当に強いよ」という言葉を掛けられたのを、安部は記憶している。試合開始前には「スクラム組みに来たのか」と揶揄してきた優勝候補に、そう言わしめる戦いぶりだったのだ。

ベンチに引き上げ、片付けをしているときに、3年生は全員泣いていたという。確かにこれで高校野球も終わりである。しかも彼らはこの1年間、試合ができなかったのだ。悔し涙が満足の涙かはわからないが、誰もが泣いていた。安部や林は2年生であり、泣くことはなかった。しかし合宿所に帰って食堂で顔を合わせたときに、3年生から「お前らが来てくれて本当によかったよ」と声を掛けられ、思わず涙が出てきたという。それから移籍組の3人は、3年生とこの4カ月間のことを語りながら、一緒に泣いたのだ。

### 2年目はなかったラグビー野球部

その後、安部と竹下は野球部を退部した。梅木にラグビー部時代の金銭面を取り沙汰される事態が起こり、梅木が野球部監督を辞任

して学校もやめてしまったからだ。2人はまたも梅木と行動を共にしたことになる。さすがに高校を退学することはなかったが……。

林は3年生で引退するまで、野球部員として活躍した。「梅木イズムがなくなり、普通の高校野球部になりました」と笑う。林は高校卒業後、日本体育大学へ進学して再びラグビーを開始。4年生の時には、関東大学対抗戦で活躍した。卒業後も就職したNTTでラグビーを続け、キャプテンとなった。現役引退後はヘッドコーチも務めている。そして取材の最後にこう語った。

「梅木先生には野球部の監督を続けてほしいかったですね。3年後の甲子園は無理だったでしょうけど、都内の強豪校には絶対なつていたと思いますよ」

梅木恒明監督率いる目黒高校ラグビー野球部。わずか一度きりの夏に終わってしまったが、その輝きを多くの人の胸に刻んでほしいと願って、今回この文章を書き留めることにした。國學院戦翌日の大会主催者である朝日新聞の記事を引用して、締め言葉にしたいと思う。

「目黒の夏は短かったが、解き放たれた獣のような気迫が見事だった」(84年7月21日、朝日新聞朝刊東京版)

※文中敬称略